

社会システム論の系譜（Ⅱ）

—社会学者としてのL. J. ヘンダーソン—

赤 坂 真 人

- IV パレートの紹介と論争
 V 社会科学への貢献
 VI ヘンダーソンによる社会学の展開
 (以下次号)

IV パレートの紹介と論争

すでに述べたとおり、1928年、アメリカにはじめてパレートの社会学理論を紹介したのはP. ソローキン (Pitirim Sorokin) であった。¹⁾ しかし彼の好意的な紹介にもかかわらず、パレートの理論は1935年に主著『社会学大綱』が英訳されるまで、ほとんど一般の関心を引くことはなかった。²⁾ だがこの翻訳と相前後して徐々にパレートに対する関心が高まってゆき、とりわけハーバードでは熱狂的なパレート崇拜が生じた。そしてこのパレート崇拜を生じさせた中心人物こそL. J. ヘンダーソンその人であった。

ヘンダーソンは1930年にカリフォルニア大学バークレー校で初めてパレートに関するセミナーを開催したのを皮切りに、以後、講義や研究会、著作と論文、同僚や後輩、弟子たちとの私的な接触、

ソサイアティ・オブ・フェロウズのような教育機関など、さまざまな回路を通してパレート社会学の啓蒙に努めた。なかでも1932年からハーバード大学でT. パーソンズ、R. K. マートン、G. C. ホマンズなど次代の社会学を担う人々を集めて開催されたパレートセミナーとT. パーソンズとの『社会的行為の構造』の草稿をめぐる私的接触は、機能主義社会学へのパレートの影響を考える場合とくに重要である。

20世紀の代表的なグラント・セオリストの一人として、パレートは研究者の視角により多様な姿を呈示する。³⁾ 社会学者としてのパレートの業績がほとんど知られていなかったアメリカにおいて、ヘンダーソンの解釈は、それ以後アメリカで語られるパレート像の原型を、すなわち社会システム論者としてのパレート像を創り出した。とりわけその解釈はT. パーソンズによって継受され、彼によって新たにアクション・セオリストとしてのイメージを加えられて今日に至っている。

ハーバード・パレート・サークル

- 1) ソローキンの『現代社会学理論』(Contemporary Sociological theories, 1928)におけるパレートの紹介は、原著の論旨を忠実にたどり要約したもので、方法論と理論を簡潔にしかも分りやすく解題している。またパレートがその方法論的主張とはうらはらに社会システムの数理的な分析をまったく展開していないことや、しばしば形而上学的な概念構成を行っているといった矛盾を正しく指摘しながらも、その方法論のおよび理論的主張の含意を、「真の科学的社会学」へ発展する可能性を持つものとして高く評価している。
- 2) F. N. ハウスによれば、この時までには自らの著作においてパレートの『社会学大綱』に言及したのはF. オッペンハイマー (Franz Oppenheimer)、P. ソローキン (Pitirim Sorokin)、E. フェアリス (Ellsworth Faris)、W. ゾンバルト (Werner Sombart) の四人にすぎない。(F. N. House, "Pareto in the Development of Modern Sociology," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, No. 1, 1935, p. 80.)
- 3) 松嶋敦茂によれば、今日に至るまでのパレート理解の諸相には次のようなものがある。①計量経済学的研究の先駆 ②「一般的経済的均衡」の確立 ③序数的効用理論の定礎 ④「新厚生経済学」の定礎 ⑤社会諸科学の「学際的総合」の最初の試み ⑥実証的経済・社会政策の創唱者 ⑦発生的構造主義の起源 ⑧「知識社会学」的分析の先駆 ⑨イデオロギー論の一典型 ⑩「(論証的) 議論」の理論化の試み ⑪社会システム論の創始 ⑫エリート主義者 ⑬マキャベリアン ⑭「ファシズムのマルクス」現実的自由主義者「民主主義のエリート論者」(松嶋敦茂『経済から社会へ パレートの生涯と思想』みすず書房 1985年、9-10頁。

著名な生化学者であり、かつハーバードの最高実力者のひとりとしての権威を背景にした彼の熱心な啓蒙は、ハーバードの研究者たちにパレート熱を生じさせた。C. ブリントンはその様子を次のように述べている。「30年代のハーバードにはヘンダーソンに率いられた、大学内の共産主義者およびその同調者、さらには穏健なアメリカ流の自由主義者までもが〈パレート崇拜〉と呼んだものが確かに存在していた。パレートに対するお気に入りの中傷句は、... 〈ブルジョアジーのカール・マルクス〉であった。パレート崇拜は教授たちの大多数に影響を与えたわけではなかったが、それはかなり広範な反響を呼び起こした。」⁴⁾

アメリカにおけるパレートの啓蒙に関し、いかにヘンダーソンが重要な役割を担っていたかということは、彼の死とともに急速にパレート熱が終息していったことが象徴的に示している。だが、この時期ハーバードでパレートが熱烈に歓迎されたのは、ひとえにヘンダーソンの啓蒙活動に帰せられるわけではない。そこにはまたパレートの受容に有利な社会状況が存在していた。

宗教社会学者によれば、一般にひとつの社会体制が崩壊し、しかも次の世はなお混沌としている大混乱の時代には、宇宙の森羅万象に唯一の絶対的神のもと、統一したイメージなり意味なりを与える創唱宗教が流行するという。⁵⁾ 宗教と社会思想を同一視するわけにはゆかないが、B. ヘイルによれば、当時、第一次世界大戦後の混沌とした世界にあっては、世界を統一的に説明し方向づける壮大な歴史的理論が求められ、それを満たすものとしてマルクスの唯物史観が流行していた。⁶⁾

アメリカにはドイツ系の移民によってマルクス

主義が持込まれ、⁷⁾ その強い影響の下に第一インター北米支部として「北米社会主義労働党」や、そこから分離独立した「国際労働者党」が結成されたが、双方ともさほど党勢を拡大することなく19世紀末には穏健なリベラルへと姿を変えていった。しかし1901年に結成された「アメリカ社会党 (Socialist Party of America)」は、これらのリベラルズを吸収して急速に勢力を拡大し、1912年には黨員14万人を数え、90万票を獲得し、下院議員1名、地方議員1039名を擁するアメリカ史上最大の左翼勢力へと成長した。⁸⁾ ところが1914年の第一次世界大戦の勃発と1917年のアメリカ参戦は国民の間に熱狂的なナショナリズムを高揚させ、反戦平和を唱える社会党への激しい弾圧を生じさせた。1919年社会党は左右に分裂し、しかも同年左派が結成した「アメリカ共産党 (Communist Party of America)」は即座に弾圧され、実質上「地下組織」へと転落した。おりからアメリカは経済の大繁栄期、いわゆる「黄金の20年代」を迎え、失業率、労働争議は激減し、これにヨーロッパでの左翼運動の退潮が追い風となって社会・共産主義活動は著しく衰退していった。⁹⁾ ところが1929年10月24日の株式大暴落から始った世界恐慌は再び高い失業率と労働争議の頻発をもたらした。1932年には1250万人に及ぶ失業者が街に溢れ、1937年にはアメリカ史上最多の労働争議件数を記録する。¹⁰⁾ ここにおいて以前と較べれば比較的穏健なかたちではあるが、左翼運動は息を吹きかえし、1912年に匹敵する勢いを取り戻した。ヘンダーソンがパレートの啓蒙に努めていた1930年代は、こうした左翼運動が最も活発であった「赤い10年」と呼ばれた時期であった。¹¹⁾

4) Letter from Crane Brinton, February 17, 1967. (quoted in Heyl, Barbara S., "The Harvard Pareto Circle," *Journal of History Behavioral Sciences*, Vol. IV, No. IV. Oct. 1968, p. 317) またホーバス夫妻もこの状況について「パレートの社会学理論は1930年代のニューイングランドにおける信仰の基礎であった」と述べている。(Steven M. Horvath and Elizabeth C. Horvath, *The Harvard Fatigue Laboratory, Its History and Contribution*. Prentice-Hall, Inc., 1973, p. 10.)

5) 大村英昭 西山茂編『現代人の宗教』友斐閣、1988年、14頁。

6) Heyl, Barbara S., *op. cit.*, 1968, p. 317.

7) Lens, Sidney, *Radicalism in America*, New York: Thomas Y. Crowell Co., 1966. S. レンズ『アメリカのラディカリズム』陸井三郎 内山祐以智訳 青木書店 1967年、128頁。

8) 津田真澄『アメリカ労働運動史』総合労働研究所 1972年、106-107頁。ちなみに S. レンズによれば1912年のアメリカ社会党の黨員は118000名となっている。Lens, S., *ibid.*, 邦訳 168頁。

9) 1927年、共産黨員は9642人、社会黨員は7493名にまで減少する。(Lens, S., *ibid.*, 邦訳 235頁。)

10) Lens, S., *ibid.*, 邦訳 236頁。津田真澄、同上 187頁。

11) Lens, S., *ibid.*, 邦訳 236-259頁。

このような左翼運動のうねりは、当然1930年代のハーバードにも押し寄せた。相対的に保守的なメンバーの多かったヘンダーソン・グループも、しばしばこれら大学内の共産主義者やその同調者の攻撃に悩まされた。ブリントンによれば、政治的には極端に保守的であったヘンダーソンは「これらのリベラルズとの戦いにおいて、彼の人間の善良さに対する、そして確固たる偉大なアメリカ民主主義の伝統に対する彼の信念に疑いを抱かせるようなパレートの、マキャベリ的な言葉を使った」という。「もちろんリベラルズは〈ファシスト〉というお気に入りの言葉で応戦した。」¹²⁾ パレートが熱烈に受入れられた文脈はここにある。因果的多元論によって一元論的な史的唯物論を、富の増大による貧困の救済を説くことで配分の平等を、社会的異質性とエリートの周流でもって労働者独裁テーゼを相対化するパレートは、マルクスに対する解毒剤として広く人気を集めた。ヘンダーソンの影響を最も強く受けた G. C. ホマンズは、自伝においてその心理的いきさつを次のように述べている。「私はパレートが好きになった。というのも彼は、私がすでに信じる準備をしていたものを明らかにしてくれたからである。... 比較的富裕な自分の家族を是認する共和主義者のポストニアンとして、私は30年代を通して個人的な攻撃に、とりわけマルクス主義者の攻撃に晒されていると感じていた。私はパレートを信じる準備ができていた。なぜなら彼は私を護るすべを与えてくれたからである。」¹³⁾

パレート論争

以上のように1930年代のハーバードではパレートが流行し、ヘンダーソンを中心とするサークルではパレートを巡る言説が飛び交った。しかしこのサークルを一歩外に出れば、彼ときわめて親しい関係にある人々を除き、パレートに対する評価は芳しいものではなかった。まず1935年5月25日付けの *Saturday Review of Literature* でパレートに関する特集が組まれたが、¹⁴⁾ 執筆者のひとりである哲学者 B. クローチェ (Benedetto Croce) は「パレート理論の妥当性 (The Validity of Pareto's Theories)」と題する論文でパレートの方法論および理論を徹底して批判した。彼によれば『社会学大綱』において用いられたパレート流の実証主義は、精神的な物事を外在的なものとして扱い、そこに法則性を見出すという不可能な論理に基づく方法であり、それゆえ彼はその企てを何も遂行することができなかった。また本書で展開されている論理的行為と非論理的行為の区別、残基と派生体の概念、そしてエリートの周流といった議論は常識的に受入れられている観念の焼き直しに過ぎず、そこには何の独創性も見当たらないと酷評した。¹⁵⁾

続いて同年10月には *Journal of Social Philosophy* 誌上で「社会理論にとってのパレートの意義」に関するシンポジウムが行われたが、そこに発表された論文もパレートに対して冷淡な評価を下したものが多かった。¹⁶⁾ とりわけ人間行動に関する本能学説で有名な社会心理学者の W. マクド

12) Crane Brinton, "Lawrence Joseph Henderson," *Saturday Club: A Century Completed, 1920-1956*, ed. E. W. Forbes and J. H. Finley, Jr., Boston: Houghton Mifflin Co., 1958, p. 213. (quoted in Heyl, Barbara S., *op. cit.*, 1968, p. 317.)

13) Homans, George C., *Sentiments And Activities: Essays in Social Sciences*, The Free Press, Glencoe, 1962, p. 4.

14) *The Saturday Review of Literature*, Vol. XII, No. 4, May 25, 1935, p. 1-5, 10-13. この特集への寄稿者と論題は次のとおりである。L. J. Henderson, "Pareto's Science of Society." Bernard De Vote, "The Importance of Pareto." Benedetto Croce, "The Validity of Pareto's Theories." Arthur Livingstone, "Vilfredo Pareto; A Biographical Portrait." ヘンダーソンの論文は同年発行の著書『パレートの一般社会学 (Pareto's General Sociology)』からの抜粋による要約であり、パレートの社会学の全体像を簡潔かつ明瞭に紹介している。デ・ポートの論文は、特に社会のシステム論的分析と人々の行為や言明を残基と派生体という概念に準拠して相対化する知識社会学的手法に着目し、『社会学大綱』を天才の業と高く評価した論文である。最後にリヴィングストンのそれはパレートの生涯をたどり、自伝として簡潔にまとめている。

15) Croce, B., *ibid.*, pp. 12-23.

16) *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1. No. 1. 1935, pp. 36-89. このシンポジウムへの寄稿者と論題は次のとおりである。Willam McDougall, "Pareto as a Psychologist." Carl Murcheson, "Pareto and Experimental

ゥーガル (William McDougall) は「心理学者としてのパレト (Pareto as a Psychologist)」と題する論文で心理学的問題に関するパレトの姿勢を激しく批判したのみならず、G. H. ブスケ (Georges Henri Bousquet)、E. R. A. セリグマン (Edwin Robert Anderson Selligman)、R. V. ウォージントン (R. V. Worthington)、B. A. デ・ボード (Bernard Augustine DeVoto)、A. ハックスレー (Aldous Huxley) などパレトを擁護する人々をも、パレトの誤謬の性質と範囲をみきわめる資質を持たず、純粋な若者をこのような馬鹿げた本に誘い込み、そこから何か有益なものを引出そうとする試みへいざなう有害な面々として徹底的に攻撃した。¹⁷⁾

これに対しヘンダーソンは翌1936年1月の同雑誌にマクドゥーガルの論文に対するコメントを発表する。しかしそれはもはや批判に対する防衛や

啓蒙を意図したものではなく、単なる皮肉交じりの辛辣な反論であった。ヘンダーソンはこれらの批判者が、科学者として真にパレトを理解するに足る能力があるとは考えていなかった。そして彼はその後も、同じような調子の手紙をマクドゥーガルとの間でやりとりし、パレト擁護の情熱を燃えあがらせていった。¹⁸⁾

もちろんヘンダーソンも『社会学大綱』のさまざまな欠陥に気づいていた。だが彼にとってそのような欠陥は、社会科学に対してなされたパレトの貢献に較べれば取るに足りないものと映った。著名な生化学者としての業績に加え、自然哲学の展開で培った古今の哲学・思想に関する深遠な知識、科学哲学や社会学に対する並外れた関心と知識、さらにフランス文学、とりわけバルザック、モンテーニュ、モリエールなどに対する深い造詣といった信じがたいほどの知識と教養を有す

Social Psychology.” James H. Tufts, “Pareto's Significance for Ethics.” Floyd N. House, “Pareto in the Development of Modern Sociology.” C. マーチェソンは「パレトと実験社会心理学」と題する論文で、パレトの方法論と概念を実験心理学的観点から批判した。彼によれば、パレトは社会システム概念を展開したにもかかわらず、その諸変数を数量的に同定および操作することができず、結果として人間社会に対するシステム分析の有効な適用に失敗してしまっただ。実験科学は人間の行動と思想が一般的に非論理的であるとするどのような証拠も提示しえない。パレトは感情を行動や思想の源泉として扱っているが、それを数量的に処理することは不可能であり、従ってまたそれに関する仮説を論理-実験的方法で検証することは不可能である。そこで彼は仮説を検証するデータとして、あらゆる言語、年代、形態の人間行動に関する記録からの引用を用いたが、それらは現象を観察した人物の制約とバイアスに彩られており、彼の提唱する普遍的な科学の営みにはそぐわないとした。倫理学者の J. H. テュフ (James H. Tufts) は「倫理学にとってのパレトの意義」という論題で、経験的に、すなわち論理-実験的に検証されえないあらゆる形而上学的信念は無意味であるとするパレトの見解に、認知に志向する没評価的な科学的信念と倫理や宗教のような価値に志向する評価的信念との峻別という見地から反論した。彼によれば、パレトは真理と効用の概念を明確に区分しており、形而上学的信念が社会に対して持つ有効性をいちおう認めてはいる。しかし最高善、正義、福利といった概念は不明瞭で非一貫的な感情の表明にすぎないとするパレトの認識は、科学と形而上学の機能的な相違を明確に区分しておらず、前者の方法を無批判に後者へ持ち込むものであると批判した。最後に F. N. ハウス (Floyd N. House) の「近代社会学の発展におけるパレト」と題する論文は、『社会学大綱』は伝統的な社会学の流れに沿うものではなく、他の著名な社会学者と比較することは困難であるとしながらも、パレトの方法論や概念をよりマクロな社会思想のなかに位置づけようと試みた論文である。他の論文とは違って、パレト社会学の特徴についての簡潔ではあるが堅実な要約がなされており、現代アメリカ社会学はパレトの成果を受容する方向にあるとして、寄稿された論文のなかでは唯一パレトを肯定的に評価している。

- 17) パレトに対するマクドゥーガルの批判を要約すれば次のとおりである。パレトの混乱の主な原因は科学と哲学の各領域を明確に区分せず、前者の方法を単純に後者に応用しようとしたことにある。彼は『社会学大綱』において明らかに心理学的問題を扱っているにもかかわらず、現代の心理学に関する知識を欠いており、歪曲された概念と不明確な定義によってそれらを記述した。彼の最大の発見のひとつとされる「人間行為の非論理性」は昔から常識として知られている事実の焼き直しに過ぎず、しかもその説明には「感情」「残基」「派生体」といった概念が登場するが、これらの概念についての明確な定義はいっさいなされていない。このように心理学的な知識を欠いたまま、人間行為の心理的局面向を記述するにあたって、パレトは二つのトリックを用いた。ひとつは「感情」という曖昧な行為の駆動力を心理学者の研究領域であるとして切り捨て、考察の対象を感情の顕現である行為や思想に限定したこと。もうひとつはそれらを客観科学におけるデータのように論理-実験的に扱うことができる自然現象であると前提したことである。
- 18) 佐々木恒夫「訳者あとがき-ローレンス・J・ヘンダーソン：その人と業績-」L. J. ヘンダーソン『組織行動の理論-パレトの一般社会学-』組織行動研究会訳 東洋書店 1975年、141-142頁。

るヘンダーソンにとって、彼らの科学方法論を中心としたパレートの批判は、いかにも稚拙でもどかしく感じられたに違いない。その結果、この論争を境にヘンダーソンはパレートの福音を説く伝道者から、パレートを擁護する熱狂的な論客へと轉身し、パレートを擁護のために誰とでも論争するようになっていったのである。¹⁹⁾

V 社会学への貢献

このようなパレート社会学の研究と啓蒙の過程において、ヘンダーソンは社会科学に対する数々の有益な提言を、主に方法論の観点から呈示した。それらはパレート同様、自然科学の方法に基づく社会科学の基礎づけという形をとったが、とりわけ論理実証主義の視点から展開された科学哲学や、システム論的な認識論および分析手法は、彼の死後半世紀を経た今日でも T. パーソンズや G. C. ホマンズを通してその影響を確認できる。

社会学に対するヘンダーソンの貢献を語る場合、われわれは次のような項目を挙げることができるだろう。それらは①科学哲学と社会学方法論 ②システムおよび社会システム概念の導入 ③パレート社会学の紹介 ④医療社会学といった項目である。以下それぞれのテーマについて順次述べてゆくことにしよう。なお社会学の方法論に関する議論は次章で検討を加えることにする。

科学哲学

前号で述べたように、ヘンダーソンは T. リチャーズの化学史の講義に触発され、科学の歴史一般に対して深い関心を抱くようになり、ついには全米で最も早い時期に始められたものの一つである科学史の講義を開講するに至った。そして1924年には全米科学史学会を創設し、自ら初代の会長

を努めたが、これらの経験は彼により広範な科学哲学上の問題についての関心を喚起した。そして一方で J. ロイスの哲学ゼミナールなどを通して科学哲学・方法論に関する研鑽を積みながら、他方、生化学という新しい学問領域の開拓と成熟に深く関与することでそれらを実践し、その過程において多くの科学哲学、方法論上の提言を行っていった。

a) 構成主義者として

ヘンダーソンは自然科学者として厳格な実証主義の立場をとった。そこから彼は科学における観察と実験の重要性を強調した。とりわけ観察は、いかなる実験も不可能であり、事象の綿密な観察がすべてであると考えられた社会科学において、もっとも重要な方法的戦略としての位置づけを与えられた。しかしながら彼は、科学は現象に内在する既存の法則を発見する過程であり、現象の予測と説明を可能にする理論は観察や経験からの帰納的一般化によって導かれるとする、素朴な帰納主義の誤謬からは完全に抜け出していた。彼は観察が理論に依存するものであることを、そしてその理論はわれわれの主観において恣意的に構成されるものであることを理解していた。従って、ヘンダーソンが重視した観察とはあくまでも理論や概念を前提として成立する観察であり、理論の精確さに応じてその精確さを増す観察言明のことにほかならない。あらゆる観察は理論に依存する。この意味においてヘンダーソンは、科学とは本質的に我々が主観において構成した理論によって対象世界を再構成してゆく過程であるとする構成主義者 (constructivist) であった。彼は、科学者は現実についての観念を形成する理論を構築する人々であり、それなくしてはいかなる思考も不可能であると考えていた。²⁰⁾ 恐らく、この立場は彼の「概念図式なしに思考することは不可能であるように

19) ヘンダーソンはとくに従兄のイェール大学教授イェルドン・ヘンダーソンと激しい論争を繰り広げたが、このようなパレートへの熱狂に対して A. L. ローウェル、C. I. バーナード、E. メイヨーなどは批判的な態度を示していたという。(Wolf, W. B., "Conversation with Chester I. Bernard," *ILR Paperback*, No. 12. Cornell University, 1973. 「回想のバーナード (I) (II) (III)」 飯野春樹訳 関西大学商学論集第18巻第1号、79頁。吉原正彦「L. J. ヘンダーソン研究序説——ハーバードにおける活動の軌跡——」千葉商大論叢、第14巻第3号、257頁。)

20) Barber, Bernard., *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1975. p. 19.

思われる」²¹⁾ という命題に象徴的に示されている。

b) 概念図式

ヘンダーソンは概念図式 (conceptual scheme) についての明確な定義を示していないが、それは構成主義者としての彼の立場を理解するうえで決定的に重要な概念である。それは彼が科学の概念図式から日常的思考の概念図式と呼ばれるものを区別し、両者の同質性と差異について論じていることから推測すると、最も広い意味で、問題となる事象について人々が平均的に有している知識の全体という意味でのフレーム (frame) および時間的ないし因果的な関係に基づいて継起する出来事のまとまりと定義されるスキーマ (schema) を指していると考えて良いであろう。このうちフレームは事象を構成する特徴的な項目 (変数) であるスロット (slot) と、その平均的な値としてのフィラー (filler) から構成される。フレームにせよスキーマにせよ双方とも行為者が新しい事態に直面したとき、事態を把握するために投げかけてみる網の目の役割を果たすもので、パターン化された知の枠組みと考えてよい。

例えば、社会システムという概念は彼の言う概念図式のひとつである。それは実際の社会を、ある観点から分析するために特定の変数のみに注目し、それらに関連づけた概念的構成物である。ヘンダーソンは社会システム概念を開示するにあたり、「私は私の経験の一部が含まれ有効となる無数の可能な概念図式のうち、そのひとつを構築する努力をする」と述べているが、²²⁾ その言明はあらゆる分析的な理論を含む概念図式の恣意的構成に関する彼の考え方を象徴している。

またヘンダーソンによれば、概念図式は科学的認識の作業を有効かつ効率的に遂行するために構成された恣意的な概念構成物である。従ってそれらは特定の目的にとって有効であるかぎり使用されるのであり、逆にその有効性が確認されなくなれば修正または廃棄されるべきものである。それゆえ概念図式を、ある究極的な形而上学的事実の記述と信じることは危険であり、それは科学的目的にとって不適切であるばかりか、誤解を招くものであるとされる。²³⁾ 恐らくこの概念図式の恣意的構成や、効用または利便性をその存廃の基準とする考え方は、彼が称賛した H. ポアンカレ (J. H. Poincare) の規約主義 (conventionalism) に準拠するものであろう。

c) 具体性置き違えの誤謬

もし理論が経験から帰納された普遍的言明のシステムなどではなく、研究者の視点からきわめて恣意的に構成された仮説的立言集であるとするなら、われわれはそれをもって現実そのものの描写と考えるわけにはゆかない。この点に関してヘンダーソンは、理論とはある特定の観点から現実の諸局面を抽象したものであり、当然、現実とは似て非なるものであること、それゆえ両者は厳格に区別されねばならないことを強調した。²⁴⁾

この概念の実体化に関する批判、換言すれば、抽象的なものを具体的なものと取り違えてしまう過ちは、とりわけ彼自身がハーバードに招聘し、²⁵⁾ 1930年代のハーバードにおいて教員や学生達に絶大な影響を与えた哲学者 A. N. ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) の「具体性置き違えの誤謬 (The fallacy of misplaced concreteness)」という概念に従って繰り返し述べられ

21) Henderson, L. J., *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition in Barber, B., *ibid.*, p. 86.

22) Henderson, L. J., "An Approximate Definition of Fact," *University of California Publications in Philosophy* 14 (1932) in Barber, B., *ibid.*, p. 160.

23) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *ibid.*, p. 76.

24) Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937. L. J. ヘンダーソン『組織行動論の基礎——パレートの一般社会学——』組織行動研究会訳 東洋書店 1975年、95-96頁。

25) 「もちろんローウェル氏が大学総長として招請状を送ったのであるが、その計画はローレンス・ヘンダーソンに端を発し、ホワイトヘッドの教授職のための資金が、ヘンリー・オズボーン・テイラー一家によって醸出されたのである。この事実は何年も後になるまでホワイトヘッド家の人たちにも分らなかった。」(Price, L., *Dialogues of Alfred North Whitehead*, Little, Brown and Company, Boston, 1954. L. プライス編『ホワイトヘッドの対話』岡田雅勝、藤本隆志訳 みすず書房、1980年、11頁。)

る。²⁶⁾

例えば社会システムを現実の社会そのものと考え、この誤謬の典型的な例である。すでに述べたように、社会システムとは無定形な現実の社会をわれわれの思考に従わせるべく、特定の観点からきわめて恣意的に変数を選定し関連づけた概念図式にはかならない。従って実際の社会に見られる具体的な均衡は、あらゆる要素の作用・反作用の結果であり、そこから選択された若干の構成要素から成る社会システムの理論的均衡状態とは明らかに異なっている。²⁷⁾ ゆえに「もっとも完成された形の均衡理論でさえも〈具体的なもの近似〉にすぎない」のであり、われわれは「思考の明確化のためにいかに重要であろうとも、抽象的なシステムを現実と取り違えてはならない」のである。²⁸⁾

d) 科学的言明の近似的性質

以上のような理論の恣意的構成や規約性、および科学的認識の限定性についての観念は、彼をして科学的認識というものが現実の近似に過ぎず、確率的な意味においてのみ真理を主張することができる営みにはかならないという見解へ導いた。われわれは現実そのものをとらえることはできない。我々が認識できるのは概念図式を通して把握される現実の一部についてのみである。われわれはそれらの断片化された現実についての認識を総合することによって、より近似的に事物の本質に迫ることができる。だが、にもかかわらずその認識をもって現実そのものと考えすることはできない。このような科学観は、ヘンダーソンの計量化志向とあいまって、あらゆる科学的言明は近似的かつ蓋然的であり、いかなる意味においても絶対的真理を主張することはできないという信念を抱かせるに至った。「われわれは観察的、実験科学的諸科学において蓋然性に関心があるのであり、確

実性にはではない。近似に関心があるのであり、絶対的正確さにはではない」。²⁹⁾ この意味で科学的真理とは、実践における有効性の基準を満たす限りでの蓋然的な言明にはかならない。

e) 論理実証主義への接近

ヘンダーソンは、その晩年、科学的認識の限定性や近似的性質への確信を強めてゆくにつれて、いっそう形而上学に対する批判を強め、より厳格な実証主義を標榜する論理実証主義へ傾いていった。彼は、当時急速に隆盛し始めたこの思想上の運動を、E. マッハや H. ポアンカレの著作を通して知っていたが、とりわけ彼らとの類似性を指摘されるパレートの著作を読んで以来、明らかにこの立場に準拠するようになった。その結果、彼はかつて『環境への適合』や『自然の秩序』等の著作において精根を傾けた世界の目的論的様相についての形而上学的考察を、すべて無意味な試みと断ずるまでに至るのである。³⁰⁾

経験的検証が不可能な命題はすべて無意味であるとする論理実証主義の明快な主張は、曖昧で経験的裏づけを欠き、しばしば価値評価をも内在する社会科学上の多くの命題を、無意味なものとして一掃する有力なイデオロギーとして彼を魅了した。哲学という営みは命題の明晰化と分析にあるとする同派の主張は、その実践を通じて社会関係を扱う「科学」の成立を予感させた。もし社会科学上の命題に明瞭で一義的な定義を与えることができるなら、それらは論理実証主義において命題の有効性を保証する唯一の基準である検証可能性を確保することが可能となる。だが社会科学には多くの言葉をめぐる議論が存在し、結果として概念は多義的かつ曖昧で、しかも共感または嫌悪の感情を伴い、さまざまな矛盾と混乱を抱えたまま使用され続けている。ヘンダーソンには、このことが社会科学において事象の斉一性の認識を妨げ

26) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, pp. 140-142. "The Study of Man," *Science* 94 (1941) : p. 5.

27) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1937, 邦訳 95-96頁。

28) Henderson, L. J., *ibid.*, 邦訳 96頁。

29) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, p. 63.

30) Parascandola, John L., "Organismic and Holistic Concepts in the Thought of L. J. Henderson." *Journal of the History of Biology*, Vol. 4, No. 1, Spring, 1971, p. 107.

ている元凶であると映った。³¹⁾ 彼の「言葉について議論するな」³²⁾ という言明は、言葉をめぐりながら上学的な解釈を停止し、明晰で正確な定義に基づく検証可能な命題の定立を要請するものであった。

ヘンダーソンによればパレートは、この事実の重要性を認識し、著書の中でこの困難を避けるべく意識的な努力を払った最初の社会学者であった。パレートは言葉の使用から生じる曖昧さや誤謬を避けるため、しばしば言葉の代りにシンボルを使い言明を定式化することを試みた。³³⁾ 一連の記号体系を用いた命題の分析は R. カルナップ (Rudolf Carnap) によってその効果が実証されたが、³⁴⁾ ヘンダーソンは彼らにならい、1932年の「事実に関する近似的定義 (An Approximate Definition of Fact)」と題する論文のなかで、われわれが事実と呼ぶ事象を「事象についての経験」「経験の言明」「結論の言明」に区分し、それぞれを一連の記号を用いて代数的に定義することを試みた。それは命題を構成する記号の論理的な分析によって、その明晰化を達成せんとする論理実証主義の主張を彼なりに実践しようと試みたものと理解されよう。³⁵⁾

システムおよび社会システム概念の導入

a) システム

パレート自身はシステム概念についてほとんど説明を与えていない。³⁶⁾ だがヘンダーソンは、彼

が書いたパレートの入門書である『パレートの一般社会学』において、隔離された物理化学システムを例に挙げてシステム概念を詳細に説明し、その啓蒙に努めた。³⁷⁾

彼によればシステムは概念図式の種類であり、我々の想像の産物である。それは研究対象の範囲を定め、変数を確定し、それらの関係を記述する有益な虚構である。システムは複数の変数によって構成され、それらの変数は相互依存的な状態にある。従ってひとつの変数における値の変化が、必然的に他のすべての変数の値の変化を生じさせることになる。その意味で原因と結果は相互的であると考えられ、通時的な一方向の影響関係を仮定する因果分析の考え方は明確に区別される。すべての変数が相互に依存しあうような有機的過程に一元的な因果的推論を持たむことは、危険であるばかりでなく、実際、我々の認識を誤らせる主要な原因のひとつである。³⁸⁾

このようなシステム概念に基づく、相互依存分析は次のような手続きに従う。まず第一に研究対象をいくつかの変数から構成されるシステムとして概念化する。その際、変数として何を、いくつ設定するかを分析目的に従って慎重に決定しなければならない。次にこれらの変数間の均衡条件を記述する方程式を変数と同じ数だけ導く。この作業がシステム分析の中心的課題となる。こうして導かれたいくつかの方程式を連立方程式として定式化し、所与の条件のもとで解いた場合得られる値、すなわちいくつかの方程式の変数を同時に満

31) Henderson, L. J., "What is Social Progress?" *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences* 73 (1941) in Barber, Bernard., *op. cit.*, 1975, p. 246.

32) Henderson, L. J., 1937. *op. cit.*, 邦訳 83頁。 *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition n Barber, B., *ibid.*, 1975, pp. 133-134.

33) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *ibid.*, 1975, pp. 133-134.

34) Ayer, A. J., *Language, Truth and Logic*, Revised Edition, Victor Gollancz Ltd., London, 1946. A. J. エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳 岩波書店 1955年、68頁。

35) 1937年2月18日付けの R. カルナップへの手紙で、ヘンダーソンは『言語の論理的統辞 (Logical syntax of Language)』に関して、「私が近代論理学の、これらのシンボルの使用法を勉強したことがないことをあなたにご存知だと思います。しかし私がこの方面を少し勉強せねばならないことは明らかです」と述べている。(Parascandola, John, L., *op. cit.*, 1971, p. 109.)

36) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1937, 邦訳 68頁。

37) Henderson, L. J., *ibid.*, 邦訳 30-53頁。

38) もうひとつの原因は、認識に対する感情の混入にあるとされる。(Henderson, L. J., "Science, Logic, and Human Intercourse," *Harvard Business Review*, April 1934, pp 319-322. *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition in Barber, Bernard., *op. cit.*, 1975, p. 139.)

たす値を当該システムの均衡点として決定する。³⁹⁾

b) 社会システム

システム概念および分析手法についての明瞭かつ詳細な説明とは対照的に、社会システム概念に関するヘンダーソンの言明はいかにも歯切れが悪い。ヘンダーソンによれば社会システムは相互作用を行っている二人かそれ以上の人々によって構成され、絶えざるメンバーの交替にもかかわらずその形態を維持する人間関係のシステムである。それは単なるメンバーの総和には還元されえない創発的特性を有し、しばしば異質な構造を持つサブ・システムを内包する有機的なまとまりである。それは基本的に複数の人間関係のシステムであるから、論理的には二人集団から、はては全世界までを社会システムとして概念化することが可能である。従って、どのレベルの集団を社会システムとして概念化するかは研究者の問題関心にかかっており、その意味でシステムの選択は恣意的である。⁴⁰⁾

以上のようにヘンダーソンは社会システムの一般の特徴を的確に指摘したが、その実質に関してはパレートの社会システム概念を紹介したにとどまり、彼独自の概念を展開するには至らなかった。おそらくその理由は、人間社会を物理化学システムのような形で概念化し、分析することは不可能であり、従って社会システム概念は、かなり限定された有用性をもつ用具にとどまらざるを得ないとした彼の判断に求められよう。⁴¹⁾

パレートによれば、社会はシステムとして概念化され、その状態は時間とともに流動する運動の過程として把握される。ある時点における社会シ

ステムの状態は、システムを形成するさまざまな構成要素、①自然条件（土壌・気候・動植物相・地理的位置・地質学、鉱物学的条件）②外的または先行的要因（空間的に外部にある社会および時間的に先行する社会の影響作用）③内的要因（人種・残基・派生体・感情・性向・利害・思考および知識状態）の相互作用によって決定される。システム分析の手法に従えば、これらすべての要素の作用のあり方を数量化し、それらの要因のどのような組合わせが、どのような社会状態を帰結するかを連立方程式の形で記述することが理想である。だがパレートは結局、これらの変数間の等質性と依存関係を把握することができず、上述のような均衡分析を実行することができなかった。

計量的な均衡分析が使えないとすれば、その代替的方法として何を用いるか。ここでパレートは社会システムの構成要素のうち、自然条件と外的または先行的要因を所与のものとして分析から除外し、残る内的要因の諸要素の関係を具体的事象に基づき分析するという手法を採用した。⁴²⁾ 彼は社会システムの内的要因のうち、残基、派生体、利害、社会の異質性に注目したが、このうち残基と派生体が彼の社会学の基礎理論を構成し、社会の異質性とエリートの周流の理論を基礎づける形をとった。残基と派生体の理論は、社会システムの具体的な単位としての人間行為の分析にあたり、計量的な均衡分析に代る代替的手法として採用されたものであるが、それはことのほかヘンダーソンを魅了した。その詳細は次節で明らかにしよう。

パレート社会学の紹介

39) ここで彼は説明の便宜のためにもっぱら閉じたシステムをモデルとし、均衡（例えば化学平衡）の存在を前提として分析を進めているが、社会システムの均衡に関しては、それが必ずしも自明のものではなく、条件依存的なものであることを慎重に指摘している。（Henderson, L. J., *op. cit.*, 1937, 邦訳、97頁。）システム分析の方法に関しては前掲書、30-53, 103-104頁参照。

40) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, pp. 89-91.

41) なぜ経済システムのような形で社会システムを記述できないのか。その原因としてヘンダーソンは次のような要因をあげる。①社会を閉じたシステムとして概念化することの不適切さ ②具体的な社会システムの境界設定の困難さ ③社会システムを実験的に創り出すことの困難さ ④社会システムの構成要素、とりわけ感情といった要素を定義することの困難さ ⑤計量的分析の不可能性。これらのうち社会システムの計量的分析の不可能性は均衡分析に対する最大の制約であり、この制約ゆえに社会システム概念は現在、そして将来にわたり限定された有用性をもつ用具にとどまるとヘンダーソンは考えていた。（Henderson, L. J., *op. cit.*, 1937, 邦訳、57-58頁。）

42) 新睦人・中野秀一郎『社会システムの考え方』友妻閣選書 1982年、32頁。

繰り返し述べてきたように、ヘンダーソンがパレートに魅了された最大の理由は、パレートが社会をシステムとして概念化し、構成要素の相互依存分析を展開しているところにあった。だがわれわれは、ここでヘンダーソンが明確に描き出したにもかかわらず、パーソンズのパレート解釈によって掻き消されてしまったもうひとつのパレート像、すなわち知識社会学の先駆としてのパレートに注目することにしよう。というのも、それは社会システムの代替的分析方法として採用された、残基と派生体の理論と深く関わるものであり、社会システムの展開と並んでヘンダーソンを大いに魅了した、もうひとつの要因であると考えられるからである。⁴³⁾

本来、経済学者であったパレートが社会学の研究を開始したのは、ひとえに彼の経済学に関する考察を完全なものにするためであった。⁴⁴⁾ 純粋経済学と呼ばれる彼の経済学は、「最少の努力で最大の満足を確保するために、目標に対して最適な手段を選択する」と仮定された、ホモ・エコノミクスの行動から生じる経済過程の理論的分析を特徴とする。⁴⁵⁾ そこからパレートは人々の欲望および選好と、その充足に対する障害という要因のみに立脚して経済システムを構築したのであった。しかしながら、やがて彼は理論的に推論された解答が必ずしも現実の問題に適さないことに、とりわけ政治的意志が関与するマクロ経済学や、その他さまざまな社会的要因が関与する応用経済学の問題に対して純粋経済学は無力であることに気づ

きはじめた。すなわち「純粋経済学は行為の理想状態を扱うわけで、その範囲内においてだけ有効であるにすぎない」。⁴⁶⁾ それゆえ「経験的現実においては、経済行為は、経済的均衡とまったく同じく、単なる推論による理論的な解釈を妨げる障害に突き当たる」。⁴⁷⁾ そこからパレートは「経験的現実について完全に考えをめぐらすためには、相互依存に従って経済的事実を他の諸事実と相関関係にある社会的事実として考えることが不可欠である」と考えるようになった。⁴⁸⁾

こうして彼は社会学の研究を開始するのであるが、そこでは必然的に純粋経済学において前提とされた「論理的行為」の範疇からこぼれ落ちる「非論理的行為」が分析の対象となった。なぜなら純粋経済学の理論の普遍的適用を阻むものは、行為の非論理性に他ならないからである。論理的行為とは、所与の目的に対して適合的な手段が選択され、結果的に当初、行為者が意図していた結果が実現されるような行為を言う。それ以外の行為はすべて非論理的行為である。⁴⁹⁾

現実の行為をこの二つの範疇に照らし合わせてみると、パレートは改めて論理的行為はきわめてまれであり、逆にたいていの行為は非論理的ないし疑似論理的行為であるとの思いを強くした。「人間は非論理的な動機から行動に駆り立てられるけれども、自分の行為を論理的に一定の原則に結びつけたがる。したがって自分の行為を正当化するために『事後』に論理を考える」。⁵⁰⁾ おうおうにしてわれわれはこの事後の論理に自ら欺かれ、

43) われわれは両者の間にさまざまな共通点を見出す。例えば、彼らは論理実証主義に基づく科学哲学や計量的分析手法において、より一般的には自然科学の方法を社会科学へ持込もうとする方法論的志向において共通しており、さらに合理主義者および自由主義者としての価値観、さまざまな学問領域にまたがる百科全書的な知識と教養、自然科学者としての経歴など価値観やイデオロギーについても共通点を有していた。加えてパレートは技術者・経営者・政治家として前半生を送ったのであり、ヘンダーソンが最も称賛した「現実に習熟した実務家」としての側面をも併せ持つ人物であった。これらのさまざまな類似性が相乗的にパレートに対するヘンダーソンの愛着を強化したことは間違いない。

44) Freund, J., *PARETO, la théorie de l'équilibre*, Seghers, Paris, 1974. J. フロイント『パレート——均衡理論——』小口信吉 板倉達文訳 文化書房博文社 1991年、48頁。

45) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、21-23頁。

46) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、50頁。

47) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、46-47頁。

48) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、49頁。

49) 非論理的行為には、「所与の目的と手段の一致が主観的にも客観的にも見られない行為」「主観的には存在するが客観的には存在しない行為」「主観的には存在しないが客観的には存在する行為」「主観的にも客観的にも存在するが、採用された手段が当初行為者が意図した結果とは異なる結果を生み出す場合の行為」という四種類がある。

50) Freund, J., *op. cit.*, 1974, 邦訳、67頁より引用。

非論理的な感情に駆り立てられて遂行した行為や発話を論理的なものであると信じ込んでしまう。パレートは言語的に表明された非論理的な感情に「残基」という名称を、事後的に与えられる正当化の論理には「派生体」という名称を与え、非論理的行為を分析する基礎理論とした。すなわち非論理的行為に付随し、その正当化をはかるえせ論理または疑似論理を派生体として退け、その背後にあって行為を方向づける残基を見出すことを分析の課題とするのである。⁵¹⁾

「人間がしばしば理性によってではなく、感情、偏見、願望、そして強い感情、希望、恐れなどによって動かされるということは一般的な心理学、生理学そして生物学的考察によって十分に確証された経験によって確立された帰納である」として、⁵²⁾ 人間が理性ではなく感情によって行為へと駆り立てられる存在であることを、従ってそれらの行為から生じる人間の事象は必然的に非論理的な性格を有することを確信していたヘンダーソンは、人間の事象の背後に潜む非論理的な感情の存在と、事後的に付け加えられるもっともらしい論理のイデオロギー性を暴露するパレートの社会学に強く惹かれた。

1937年以降、ヘンダーソンは「具体社会学」という社会学の入門講義を開始するが、そこではもっぱらパレートの残基と派生体を概念図式として用い、一見論理的に見えるわれわれの行為や発話がいかに非論理的な感情や価値の合理化に過ぎないものであるかを示そうとした。こうしてヘンダーソンは知識社会学の先駆としてのパレート像を明確に描き出した。

医療社会学

現在ではそうでもないが、ヘンダーソンが「社会システムとしての医者と患者 (Physician and Patient as a Social System)」という論文を書い

たころ、医者と患者を社会システムとして扱うという発想はきわめて斬新なものであった。医療社会学の領域でヘンダーソンが引用されることはほとんどないが、彼は医者と患者を役割構造の観点から分析した T. パーソンズへの影響を通して、間接的ながら重要な影響を及ぼした。

ヘンダーソンの出発点は、当時、急速に発達しつつあった自然科学の成果に立脚する医学が、患者を単なる治療の対象として扱い、医者と患者の個人的関係といった心理—社会的局面を軽視する風潮に対する批判にあった。患者は単なる変調をきたした有機的システムにすぎず、治療とはシステムの攪乱要因を除去することにほかならないといった視点は、当然のことながら患者のパーソナリティや彼が置かれている社会的条件の軽視につながる。だが人間は単なる生物有機体ではない。患者の精神状態は治療効果に大きな影響を及ぼすことが知られているし、医者と患者の有効なコミュニケーションは、単に患者の満足度を高めるだけでなく、より効果的な治療の実践にとって不可欠な要素でもある。おそらくヘンダーソンは、当時急速に活発化してきた「精神身体医学 (Psychosomatics)」の思想との関わりの中でそのことを深く理解していた。⁵³⁾

そこでこのような事態を改善するために医者と患者の関係についての科学的な定式化が必要となるが、ここでヘンダーソンはパレートの概念図式、すなわち社会システム概念を応用する。彼は医者と患者を社会システムとして概念化し、その最も重要な局面と考える両者の感情的相互作用に焦点を定め分析を行う。疾病の効果的治療と患者の福利のため、患者の発話の背後に潜む感情を把握することが重要であると考えたヘンダーソンにとって、行為や発話の背後に潜む残基の把握という社会システムの分析手法は、まさに最善の方法であると思われた。

このような視点からヘンダーソンは、患者に対

51) Henderson, L. J., 1937, *op. cit.*, 邦訳, 63頁。Freund, J., *op. cit.*, 1974, 邦訳, 102頁。

52) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, p. 84.

53) Parsons, T., "On Building Social System Theory : A Personal History," *Social Systems and The Evolution of Action Theory*. The Free Press 1978. T. パーソンズ『社会体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳 誠信書房、1992年、42頁。*Social Structure and Personality*, The Free Press of Glencoe, 1964. T. パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』武田良三監訳 新泉社、1973年、435頁。

する医師の対応についていくつかの興味深い提言を行った。⁵⁴⁾ 極言すれば、これらの提言はすべて「患者は理性ではなく感情によって行為する」という命題から演繹されている。以下、その要点を簡潔にまとめてみよう。

ヘンダーソンによれば、患者の発話は彼の感情を示す重要な指標である。ゆえに医師は患者の発話に興味をもたねばならない。その際、患者の発話や行動に関する価値判断や道徳的評価は慎むべきである。というのも、彼らはそのような道徳的判断に従って行動しはしないからである。患者の態度を変化させるのは論理ではなく感情である。そこで医師は患者の態度を変えるために彼の感情をうまく利用せねばならない。

次に患者との対話において、医師は第一に患者が言いたいことを、第二に言いたくないことを、そして第三に言えないことを聞かねばならない。患者が言いたくないことや言えないことを聞くために、医師は精神分析理論をはじめとするさまざまな技法を援用すべきである。医師は患者の発話から字義通りの意味ではなく、それが暗示するメタメッセージを、すなわちなぜ彼はそう言うのかという動機を読み取らねばならない。逆に、医師は患者を不安や絶望に陥らせることのないよう、自らの発話や態度の表明に注意する必要がある。患者は医師の発話に敏感に反応し、時には医師が想像だにできなかった意味を引出すことさえあるからだ。とりわけ「これは事実だ」という開き直りによって、患者にむきだしの真実を突きつけることは厳に慎まねばならない。「これは癌だ」という単純な発言は、患者に苦痛や死に対する恐怖といった感情的反応のみならず、さまざまな医学的・生理学的変化をも生じさせる。

最後に、医師はできるだけ患者に危害を加えないよう配慮せねばならない。医師は多かれ少なかれ不可避免的に患者に危害を加える。このことは決して投薬や手術といった医療技術上のミスに限られるものではない。医師は彼の感情の表明や言い損ねによっても患者に危害を加えることを銘記しておかねばならない。

以上から明らかなように、ヘンダーソンの医師—患者関係に関する提言は、両者の間で行われるコミュニケーションの分析に、とりわけ両者の情動的な相互作用の重要性に注意を喚起するものであるが、その視点には当時としてきわめて斬新なものがあつたと評価できるだろう。ちなみに、ここでヘンダーソンは感情という言葉を行為のさまざまな動機的要素という広い意味で使用している。とすれば患者の感情の把握という分析目的は、把握の手法を全く異にするものの、形式的には M. ウェーバーの行為の動機的理解と類比される視点であると考えてよいだろう。

VI ヘンダーソンによる社会学の展開

Sociology 23 Lectures

社会学についてのヘンダーソンの思考を体系的に理解するには、彼が晩年に執筆した『社会学23・入門講座 (Sociology 23 Lectures)』を読むのが最良の方法である。⁵⁵⁾ 本書は、社会学についてのヘンダーソンの思考を、体系的に呈示する唯一のデータであるといってもよい。序文によれば、本書はハーバード・カレッジで行われた「具体社会学 (Concrete Sociology)」と題された講義の産物である。⁵⁶⁾ C. I. バーナードによれば、この講

54) Henderson, L. J., "Physician and Patient as a Social System," in Barber, B., *op. cit.*, 1975, pp. 208-213.

55) 本書は出版の予定であったが、ヘンダーソンの急死によって頓挫してしまった。彼の死後、友人であった C. I. バーナードが出版のための編纂の仕事自ら引き受けた。彼はヘンダーソン自身が書いた250頁にもなる自伝原稿を彼の子息から譲り受け、それをもとに序章と第四章を書き、『具体社会学入門』(Introductory Lectures in Concrete Sociology)として完成させた。しかし結局はヘンダーソンの原稿を読んだハーバード大学の社会学関係者たちのヘンダーソンに対する低い評価から出版を断念せざるをえなかった。バーナードによって編集された『具体社会学』は次のような構成をとっていた。I. Introduction II. Biographical Book Ground III. The Course 23 in Harvard College. IV. The Manuscript and its Editing. (佐々木恒夫「訳者あとがき—ローレンス・J. ヘンダーソン：その人と業績—」L. J. Henderson, *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937. L. J. ヘンダーソン『組織行動論の基礎——パレートの一般社会学——』組織行動研究会訳 東洋書店 1975年所収、120頁。)

56) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, p. 57.

義の当面の目的は受講生に人間の相互作用に関する多くの具体的なケースを示し、人間関係の諸問題に対する科学的なアプローチを説明しようとするのであった。⁵⁷⁾ だが、同時にヘンダーソンにとってこの講義は、パレートを土台として構想した社会学の輪郭を、概念図式の形で体系的に呈示する唯一の機会でもあった。

W. B. キヤノンによれば、この講義は、最初にヘンダーソンが抽象的な理論的枠組みを述べ、次にそれを例証するものとして、ゲスト講師が具体的な事例を紹介し、最後にヘンダーソンが、これらの事例と自らの概念図式とがいかなる関係にあるかをコメントするという形式で進められていった。⁵⁸⁾ 本書はこの講義の形式を忠実に反映しており、次の三つの部分から成るものとして執筆され

た。⁵⁹⁾ パート I ではヘンダーソンが考える社会学の概念図式が示され、あわせて社会学および社会科学一般に関する方法論についての議論が展開される。ヘンダーソンに即して述べるなら、「ここでは講義においてもそうであったように、より重要な要素、要因および人間の相互作用の局面をいくつか分析し、記述することが目的である」。⁶⁰⁾ パート II はパート I で示されたフレームを例証するために選ばれた、さまざまな文献からの抜粋によって構成される。従って読者はパート I を読みながら、しばしばパート II を参照することが求められる。⁶¹⁾ 最後にパート III は上述の講義「具体社会学」に招かれたゲスト講師によって呈示された、いくつかの事例によって構成される予定であった。⁶²⁾ 以下、ヘンダーソンの社会学に関する思考が集約

57) 「1937年に、故ローレンス・J・ヘンダーソン教授は「具体社会学」(“Concrete Sociology”)において一つの実験コースを企てた。当面の目的は、社会的状況における人間の相互作用と行動にかかわる多くの具体的な事例を提示して、そのような状況のもつ重要な性質を伝え、それによって人間関係の諸問題に対する科学的アプローチの実例を学生たちに供することであった。この目的のために、ヘンダーソン教授が教授会メンバー、法律家、医師および実務家などほぼ30人程の助力を仰いだところ、各人が一つまたはそれ以上の事例を提供することに同意した。事例を提供する各人は親しくそれに参加した経験をもつか、ないしはそれについての直接の観察者であること、あるいはその事例が歴史的に時間を経たものである場合には、その既知の事実について完全に精通していることが可能な限り望まれた。このような具体性が求められたのは、ヘンダーソン博士が社会科学の進歩のためには主題の具体的な資料についての血の通った習熟や、これまでの大方の社会科学者たちに欠如していた経験が必要であると信じていたからである。」(C. I. Bernard, *Organization and Management*, Chap. III, “Introduction.” 『組織と管理』飯野春樹監訳、日本バーナード協会訳 文眞堂 1990年、52頁。)

58) Cannon, Walter B., “Biographical Memoir of Lawrece Joseph Henderson : 1878-1942,” Vol. 23, pp. 31-58, in *National Academy of Sciences, Biographical Memoires*, Washington : The Academy, 1945. p. 43.

59) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, pp. 58-63.

60) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 58.

61) 抜粋は「古代、中世、近代を問わず、あらゆる種類の文献から選ばれた。それらは事実と虚構、散文と詩、賢明なる判断、意見またはそうでない判断や意見といったものを含んでいる。またそれは、私生活、公的生活、ビジネス等の各領域における、いろいろな種類の出来事を選び呈示して」おり、その選択は「人々の相互作用における、もっとも一般的な斉一性のいくつかを説明する目的に従って決定された。」(Henderson, L. J., *ibid.*, p. 63.)

62) ゲスト講師として招かれ、講義を行った人々は次の通りである。それは彼の多彩な人脈を如実に物語っている。(Barber, B., *op. cit.*, 1975, p. 41.)

Crane Brinton (歴史学者) フランス革命における不条理な立法の変遷

George Homans (社会学者) 13世紀イギリスの農村

Elton Mayo (心理学者) ペンシルベニア工場における作業の組織化

Conrad Arensberg (人類学者) アイルランド農民の生活構造

T. N. Whitehead (社会学者) ホーソン〜ウエスタン・エレクトリック・リサーチ

Arther Darby Nock (宗教学者) 宗教社会学におけるいくつかのトピックス

Lawrence Lawell (ハーバード総長) イギリス議会システムの発展

Fritz J. Roethlisberger (社会心理学者) ホーソン・リサーチ

Melvin Copeland (ビジネス・スクール教授) 工場プラントにおける経営者の権威

Dean Wallace B. Donham (同上) 1917年における路面電車労働者たちの組合化

Eliot D. Capple (人類学者) ヤンキーシティにおける社会的相互作用

Pendilton Herring (政治学者) 国家予算の均衡化計画

Dr. Monsell (精神分析医) 若者のノイローゼに関する事例研究

Dr. David Dill (生化学者) 高温での人間の労働に関する生理学的、社会的研究

Dr. Ross McFarland (社会学者) アメリカへのイタリア移民の同化

Dr. Roger Lee (医師) 病気の社会的、心理的側面について

されているパート I をテキストとして、彼が構想した社会学の輪郭を描き出してみよう。⁶³⁾

社会学の概念図式

ヘンダーソンによれば本書の目的は、「概念図式の助けを借りて具体的な事例を研究すること」であった。⁶⁴⁾ だが、すでに述べたように分析の題材となる事例は、すべて多種多様な文献からの抜粋とゲスト講師が提供する事例で構成された。従ってヘンダーソンは、実際のところ社会学の概念図式以外には、理論に関するものを何も呈示していない。だが、その概念図式でさえ、実質的にはパレートの社会システム、とりわけその中核としての残基と派生体の紹介と説明であり、独自の理論的考察はほとんどなされていない。⁶⁵⁾

この社会システムを分析するための変数として、ヘンダーソンは①構成要素としての人々 ②異質性：a) 人々の異質性 b) 持続的な人間関係 c) 持続的な組織 ③経済的利害 ④残基 ⑤派生体 ⑥科学 ⑦論理の七つを挙げた。⁶⁶⁾ だが、これらはパレートが社会システムの内的要因とし

て挙げた諸変数に、社会システムは論理的行為から成る経済的システムを内包するという理由で科学と論理を付け加えたものにすぎない。⁶⁷⁾ むしろここでは、彼がこれらの構成要素をパーソンズが『社会的行為の構造』で分析した社会的行為の構造的構成要素（行為の準拠枠組を構成する変数）と同じものであると述べている点が興味深い。⁶⁸⁾ なぜなら、もしそうだとすればヘンダーソンのこの見解は、彼もまたパーソンズ同様、社会システムは人々の相互作用からなるシステムであり、それゆえそれは社会的行為の理論によって基礎づけられると考えていたことを暗示するからである。

社会学方法論

社会学の概念図式に関する言明の凡様さと比較すれば、方法論に関するヘンダーソンの提言には数々の興味深い見解が窺える。ヘンダーソンによれば社会学とは「二人もしくはそれ以上の人々の間で相互作用が生じる、あらゆる出来事と過程とを含む」現象に精通する科学、⁶⁹⁾ または端的に「人々の相互作用に精通するもの」⁷⁰⁾ である。ここ

Dr. Arlie V. Bock (医師) 若手医師のトレーニング

Bullock (ビジネス・スクール教授) 課税可能な財産の再評価政策

Talcott Parsons (社会学者) 医療についての社会的諸側面

Clyde Kluckhohn (人類学者) ナホバインディアン

Nathen Issacs (ビジネス・スクール教授) 1930年代の農業立法

Chester I. Barnard (実業家) 1930年代ニュージャージーにおける失業者の暴動

Dr. Reynold (医師) 病気の社会的要因

E. B. Wilson (経済学者) 国家資源委員会における科学委員としての活動について

Dean Fox (ビジネス・スクール教授) 学生の行動についての社会—心理学的側面

63) パート I は次のような構成をとっていた。Preface, Chapter I : Procedure in a Science, Chapter II : The Social System, Chapter III : The Use of the Conceptual Scheme, Chapter IV : An Essay in the Interpretation of a Future of our Times. および往復書簡と短い論文からなる付録。(佐々木恒夫、前掲書、143頁。) だが B. パーバー編集による *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings* に収められた “Sociology 23 Lectures” には Chapter IV と往復書簡および付録が欠落している。

64) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42 edition in Barber, B., *op. cit.*, 1975, p. 106.

65) ヘンダーソンはパレートの社会システムに関して「もし彼が社会システムの変数をもっと巧妙に選択していたなら、矛盾は最小限に抑えることができたであろう」と述べており、また残基の分類に関しても「(残基の) I と II は彼の目的によく役立っているが、それ以外は諸事実を有効に分類するための標識を提供するが、その他の目的にはほとんど役立たない」と厳しく批判している。(Henderson, L. J., *op. cit.*, 1937, 邦訳、99頁、79頁。)

66) Henderson, L. J., *op. cit.*, 1941-42, p. 98, 147.

67) ここで科学とは自然科学のみならず信賴に足る客観的知識をも含むものであり、論理は常識的な一般的取り決めを含む。ヘンダーソンによれば、パレートは社会システムの非論理的局面を分析の対象としたがゆえにこれらの二つを除外したが、社会システムが経済システムを含むものであるかぎり、これらの要素はもまた含まれねばならないと主張される。(Henderson, L. J., *ibid.*, p. 102.)

68) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 110.

69) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 59.

70) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 61.

から社会学は人々の感情に基づく相互作用を分析することが焦点となるが、ヘンダーソンによれば、それらの分析に際し、社会学は医学の方法をモデルとすべきであると主張される。

a) 社会学のデータ

なぜ社会学において医学の方法を採用することが有効であると考えられるのか。その理由は何よりも社会学のデータの特殊な性質と、その分析の困難さに由来する。ヘンダーソンによれば、社会学のデータは「彼らの相互作用と関連する限りでの、人々が述べたこと、したこと、彼らに起こったことなどから成る」。そして「これらの伝聞証拠は、口頭で述べられたものであろうと、印刷物であろうと、そこから社会科学が構築されねばならない原材料の大部分を占め」、⁷¹⁾ その解釈の技術および実践は社会科学の本質的な要素であると主張される。⁷²⁾ その際、研究者はそれらの発話を字義通りに理解するだけでは不十分であり、その発話に込められている感情と態度を理解せねばならない。なぜなら「さまざまな状況や事柄において人間が述べる多くの事柄は真実でも誤りでもない。それらは希望、恐れ、執念、好き、嫌い、大望、そして勇気の表現である」に過ぎないからだ。⁷³⁾

科学論文のような論理的なテキストの場合には、コードに従った解釈で十分である。しかし一般の非論理的な発話や行為を理解するにあたっては、コンテキストを参照しながらの「解釈」が必要となる。とりわけ感情の理解には、単なる言語的シンボルのみならず、ジェスチャー、表情、声の高低、速さ、リズムといった準言語と呼ばれるもの、さらには発話者の身体的、心理的、社会的特性および行為や発話がなされた状況といったコンテキストへの参照が不可欠となる。

b) モデルとしての医師の方法

医師の方法が有効性を発揮するのはここである。ヘンダーソンによれば、医師は患者の発話の

コノテーションを、さらにはその背後にある感情や態度を推論するエキスパートである。すなわち「熟練した医師は、彼が言われたことの意味をよく考え解釈する。彼はその解釈をその患者について知っているさまざまな事実によって修正する」。このようにして医師は患者が言いたいことを聞き、第二に患者が言いたくないことの含意を、最後に患者がうまく言うことのできないことの含意を汲み取る。さらに医師は彼自身の仮定や信念、感情の混入に気をつける。こうして熟練した医師は、彼の患者にとって知ることが大切なものをよく理解する」。⁷⁴⁾

すでに述べたように、ヘンダーソンは〈社会システムとしての医者と患者〉という概念図式において、医者と患者の間で行われるコミュニケーションの重要性に注意を喚起し、患者の発話に託されるメタメッセージの、とりわけ感情の把握を重視した。それらは単に患者の満足度を高めるだけでなく、より効果的な治療の実践にとって不可欠な要素でもあったと考えられたからである。それでは、なぜ熟練した医師は患者の発話のメタメッセージを読み取ることに長けているのか。それは何よりも、彼が患者と交わされるコミュニケーションに習熟しているからである。

c) 研究対象への直観的習熟

厳格な実証主義者として理論のみならずその検証を重視したヘンダーソンにとって、統制された条件下での社会科学上の実験がほとんど行われていなかった当時の状況は、人間関係に関する科学の成立に疑問を抱かせ、結果として彼は「事象の綿密な観察」および「事象への直感的習熟」が彼の時代における社会科学に可能なすべてであるという見解を示すに至った。⁷⁵⁾

それでは「事象への直観的習熟」とは具体的に何を意味するのであろうか。バーナードによれば、ヘンダーソンは1913-15年にかけて、W. パルマーとマサチューセッツ総合病院でアシドーシス

71) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 80.

72) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 83.

73) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 82.

74) Henderson, L. J., *ibid.*, p. 80.

75) Barber, B., *op. cit.*, 1975, p. 17.

についての共同研究を行った際、臨床経験を持つ医師たちが、他のどんな方法によっても得られないような直感的知識を習得していること、それによって彼らが種々の条件のもとで何が起きようとしているかを正確に予測することに感銘を受けた。そしてこのことが、彼に直観的習熟の重要性を認識させる契機となったという。⁷⁶⁾

一般に論理学には「前件肯定式」「後件肯定式」「前件否定式」「後件否定式」という四つの推論形式が存在する。このうち医師の診断や予測は「後件肯定式推論」に分類される。後件肯定式推論とは、「もしAならばBである。いまBである。ゆえにAである」という三段論法に示されるように、第一前提である条件文の後件「Bである」を肯定する条件を第二前提とすることによって、第一前提の前件を肯定する結論を演繹する推論形式を言う。たとえば、「もし彼がインフルエンザであれば頭痛がする」という条件文を第一前提とすると、「いま彼は頭痛がする」という第二前提から「ゆえに彼はインフルエンザにかかっている」という結論が導かれる。

だがすぐ気づくように、この推論形式は必ずしも正しい結論を導くわけではない。つまり頭痛がするからといって、必ずしもインフルエンザにかかっているわけではない。もしかしたら脳出血とか脳腫瘍であるかもしれないし、一酸化炭素中毒や肩凝りによる頭痛であるかもしれない。このように後件肯定式推論は、前件と後件の因果関係が一義的でない場合、100%の信頼を持つことはできない。しかしわれわれは、前件を推理する条件となる後件（指標）を精密化することで、その信頼性を高めることができる。例えば、さきほどの場合、もし頭痛に加え<咳や高熱>という指標が加われば、インフルエンザである可能性が高くなる。さらに<上気道、鼻腔、結膜の炎症>という指標が加われば、その他の病気である可能性はさらに小さくなる。これらの指標への習熟なくして的確な診断はありえない。

以上から明らかなように、事象への直感的習熟とは「ある事象」と「その事象が生じていることを示す指標」に精通することを意味している。因

果の多元論の立場からシステム論的分析を提起するも、その厳密な適用が不可能な社会現象の分析においては、現象の発生を示す指標を熟知し、そこから現象の診断・予測を行うことが、とりあえず可能な次善の策であるとヘンダーソンは考えた。社会学者はなによりも、綿密な観察によって研究対象に習熟せねばならない。現場の状況を熟知している実務家は、しばしば空虚な理論をこねまわすだけの研究者よりもはるかにすぐれた理解と洞察を示す。そして、これこそヘンダーソンが、ニュージャージー・ベル電話会社の社長であったC. I. バーナードのような実務家を高く評価した理由であった。(以下次号)

参考文献

- Ayer, A. J., *Language, Truth and Logic*, Revised Edition, Victor Gollancz Ltd., London, 1946. A. J. エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳 岩波書店 1955年。
- Barber, Bernard., *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1975.
- Barnard, Chester I., *Organization and Management : Selected Papers*, Harvard University Press, 1948. C. I. バーナード『組織と管理』飯野春樹監訳 日本バーナード協会訳 文眞堂、1990年。
- Brinton, Crane (ed.). *The Society of Fellows*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1959.
- Cannon, Walter B., "Biographical Memoir of Lawrence Joseph Henderson : 1878-1942," Vol. 23, pp 31-58, in National Academy of Sciences, *Biographical Memoires, Washington : The Academy, 1945*.
- Chalmers, A. F., *What is this called Science?*, University of Queensland Press, 1979. A. F. チャルマーズ『科学論の展開』高田紀代志・佐野正博訳 恒星社厚生閣、1983年。
- Creedy, F., "Residues and Derivations in Three Articles on Pareto," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 2, pp. 175-179.
- Collins, Randall & Makowsky, Michael, *The Discovery of Society*, Random House, 1984. R. コリンズ・M. マコウスキー『社会の発見』大野雅敏訳 東信堂 1987年。

76) Wolf, W. B., *op. cit.*, 1973, 邦訳 78頁。

- Croce, Benedetto, "The Validity of Pareto's Theories," *The Saturday Review of Literature*, Vol. XII, No. 4, May 25, 1935, pp. 12-13.
- De Vote, Bernard, "The Importance of Pareto," *The Saturday Review of Literature*, Vol. XII, No. 4, May 25, 1935, p. 11.
- Freund, J., *PARETO, la théorie de l'équilibre*, Seghers, Paris, 1974. J. フロイント『パレート—均衡理論—』小口信吉 板倉達文訳 文化書房博文社 1991年。
- Henderson, L. J., "The Theory of Neutrality Regulation in the Animal Organism," *American Journal of Physiology*, 21 (1908), pp. 427-448.
- , *The Fitness of the Environment*. New York: The Macmillan Company, 1913.
- , *The Order of Nature: An Essay*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1917.
- , *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937. L. J. ヘンダーソン『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』組織行動研究会訳 東洋書店 1975年。
- , *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition, previously unpublished.
- , Introduction to Claude Bernard. *An Introduction to the Study of Experimental Medicine*. Translated by H. C. Green, Macmillan Company, 1927.
- , "An Approximate Definition of Fact," *University of California Publications in Philosophy*, 14 (1932): pp. 179-199.
- , "Science, Logic, and Human Inter-course," *Harvard Business Review*, April, 1934, pp. 317-327.
- , "Pareto's Science of Society," *Saturday Review of Literature*, 25 May, 1935, pp. 3-4, 10.
- , "The Relation of Medicine to the Fundamental Sciences," *Sciences*, 82 (1935): pp. 477-481.
- , "Physician and Patient as a Social System," *New England Journal of Medicine*, 212 (1935): pp. 819-823.
- , "Comment and Rejoinders, McDougall vs. Pareto," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 2, p. 168.
- , "The Practice of Medicine as Applied Sociology," *Transactions of the Association of American Physicians*, 51 (1936): pp. 8-15.
- , [With Elton Mayo] "The Effects of Social Environment," *Journal of Industrial Hygiene and Toxicology*, 18 (1936): pp. 401-416.
- , "Aphorisms on the Advertising of Alkalies," *Harvard Business Review*, Autumn 1937, pp. 17-23.
- , "What is Social Progress?" *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences*, 73 (1941): pp. 457-463.
- , "The Study of Man," *Science*, 94 (1941): pp. 1-10.
- Heyl, Barbara S., "The Harvard Pareto Circle," *Journal of History Behavioral Sciences*, Vol. IV, No. IV, Oct, 1968.
- Homans, George C., *Sentiments And Activities: Essays in Social Sciences*, The Free Press, Glenco, 1962.
- , "Henderson, L. J." in D. L. Sills (ed.) *International Encyclopedia of Social Sciences*, New York, Macmillan, 1968, Vol. VI, pp. 350-351.
- House, Floyd N., "Pareto in the Development of Modern Sociology," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 1, pp. 78-89.
- Hughes, H. S., *Consciousness and Society*, Alfred A. Knopf, Inc., New York, 1958. H. S. ヒューズ『意識と社会』生松敬三 荒川幾男訳 みすず書房、1970年。
- Lens, Sidney, *Radicalism in America*, New York: Thomas Y. Crowell Co., 1966. S. レンズ『アメリカのラディカリズム』陸井三郎 内山祐以智訳 青木書店 1967年。
- Lilienfeld, Robert, *The Rise of Systems Theory*, John Wiley & Sons, 1978.
- Livingston, Arthur, "A Biographical Portrait of Vilfred Pareto," *The Saturday Review of Literature*, Vol. XII, No. 4, May 25, 1935, p. 12.
- McDougall, William, "Pareto as a Psychologist," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 1, pp. 36-52.
- Morison S. Eliot, *The Oxford History of the American People*, 1965. S. E. モリソン『アメリカの歴史』西川正身翻訳監修 集英社 1976年。
- Murcheson, Carl, "Pareto and Experimental Social Psychology," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 1, pp. 53-63.
- Pareto, V., *Trattato di Sociologia Generale*: G. Barbéra, 1916. 『社会学大綱』北川隆吉 廣田明 板倉達文訳 青木書店 1987年。
- Parascandola, John L., "Organismic and Holistic Concepts in the Thought of L. J. Henderson." *Journal of the History of Biology*, Vol. 4, No. 1, Spring, 1971, pp. 63-113.
- Parsons, T., "An Approach to Psychological Theory in terms of The Theory of Action," "Koch

Sigmund (ed.) *Psychology*, 1959.

- , “On Building Social System Theory : A Personal History,” *Social Systems and The Evolution of Action Theory*. The Free Press 1978. T. パーソナルズ『社会体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳 誠信書房、1992年。
- , *Social Structure and Personality*, The Free Press of Glencoe, 1964. T. パーソナルズ『社会構造とパーソナリティ』武田良三監訳 新泉社、1973年。
- Price, L., *Dialogues of Alfred North Whitehead*, Little, Brown and Company, Boston, 1954. L. プライス編『ホワイトヘッドの対話』岡田雅勝、藤本隆志訳 みすず書房、1980年。
- Russett, C. E., *The Concept of Equilibrium in American Social Thought*, New Haven : York University Press, 1966.
- Sorokin, Pitirim, *Contemporary Sociological Theories*, Harper & Brothers, New York and London, 1928.
- Tufts, James H., “Pareto’ s significance for Ethics,” *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 1, pp. 64-77.
- Wolf, W. B., “Conversations with Chester I. Barnard,” *ILR Paperback*, No. 12. Cornell University, 1973. 「回想のバーナード（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）」飯野春樹訳 関西大学商学論集第18巻、第1号、第2号、第3号。
- 新睦人・中野秀一郎『社会システムの考え方』友斐閣選書 1982年。
- 伊東光晴・根井雅弘、『シュンペーター』岩波書店 1993年。
- 佐々木恒夫「ローレンス・J・ヘンダーソンについての覚書き—バーナード理論の社会学的基礎—」千葉商大論叢、第11巻、第1号-B、1973年。
- 「訳者あとがき—ローレンス・J・ヘンダーソン：その人と業績—」 J. ヘンダーソン著 組織行動研究会訳『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』東洋書店 1975年、116-144頁。
- 新明正道『社会学的機能主義』誠信書房 1967年。
- 『現代知識社会学論』巖松堂書店、1935年。
- 津田真澄『アメリカ労働運動史』総合労働研究所 1972年。
- 松嶋敦茂『経済から社会へ—パレートの生涯と思想—』みすず書房 1985年。
- 吉原正彦「L. J. ヘンダーソン研究序説—ハーバードにおける活動の軌跡—」千葉商大論叢、第14巻、第3号、239-266頁、1976年。